

《薬局サーベイランスコメント》

『インフルエンザの流行は第 10 週の推定患者数が 6 週間ぶりに 100 万人を下回り、第 11 週（3 月 14 日～20 日）に入って漸く本格的な流行状態から脱しつつある。さらに第 12 週以降は、急激に患者数は減少していくものと予想される』

2016 年 3 月 15 日
済生会中津病院感染管理室
安井 良則

薬 局 サ ー ベ イ ラ ン ス

(<http://prescription.orca.med.or.jp/syndromic/kanjyasukei/index.html>) からの 2016 年第 10 週(3 月 7 日～3 月 13 日)の 1 週間当たりのインフルエンザの推定患者数は 903,283 となり、4 週連続で前週の値よりも減少し、かつ第 4 週以来 6 週間ぶりに 100 万人を下回りました(図 1)。各都道府県別の第 10 週の人口 1 万人当たりの 1 週間の推定受診者数をみると、愛媛県、岐阜県、福井県、岡山県、富山県、奈良県、高知県、長野県、愛知県の順となっており、北海道と青森県を除く 45 都府県で前週よりも減少がみられました。

3 月 14 日(月)の推定患者数は 157,767 と前週である第 10 週の月曜日の値(3 月 7 日: 261,125)よりも大きく減少しており、漸く 2015/2016 シーズンのインフルエンザは漸く本格的な流行から脱しつつあると予想されます。

2015 年第 36 週から 2016 年第 10 週までの累積の推定患者数は 8,485,164(8,485,000)であり、年齢群別では 5～9 歳(21.6%)、10～14 歳(13.3%)、40～49 歳(12.8%)、30～39 歳(12.3%)、0～4 歳(10.9%)、50～59 歳(7.6%)、20～29 歳(6.7%)、60～69 歳(5.6%)、15～19 歳(5.3%)、70 歳以上(3.8%)の順となっています(図 2)。第 10 週は全ての年齢群において前週よりも減少しています。

国立感染症研究所感染症疫学センターの病原微生物情報(<https://nesid3g.mhlw.go.jp/Byogentai/Pdf/data2j.pdf>)によると、これまでのインフルエンザ患者由来検体から検出されたインフルエンザウイルス(3,387 検体解析)は、A/H1pdm 57.4%、B 型 30.9%、A/H3(A 香港)亜型 11.7%の順となっています(図 3)。また、直近の 5 週間(2016 年第 6 週～第 10 週; これまでに 654 検体検出報告)では、A/H1pdm 56.4%、B 型 39.8%、A/H3(A 香港)亜型 3.8%の順となっていて、A/H1pdm と B 型の混合流行であることに変わりはありませんが、B 型の割合が増加してきています。

今シーズンのインフルエンザの流行は立ち上がりから遅かったものの、本格的な流行期間が長く、第10週の推定患者数が6週間ぶりに100万人を下回り、第11週（3月14日～20日）に入って漸く本格的な流行状態から脱しつつあります。また、大半の学校が春季休暇に入る第12週以降は、急激に患者数は減少していくものと予想されます。しかし、例年の同時期の患者発生状況と比較するとまだ患者発生数の多い状態が続いており、今しばらくはインフルエンザの患者数の推移には注意が必要です。

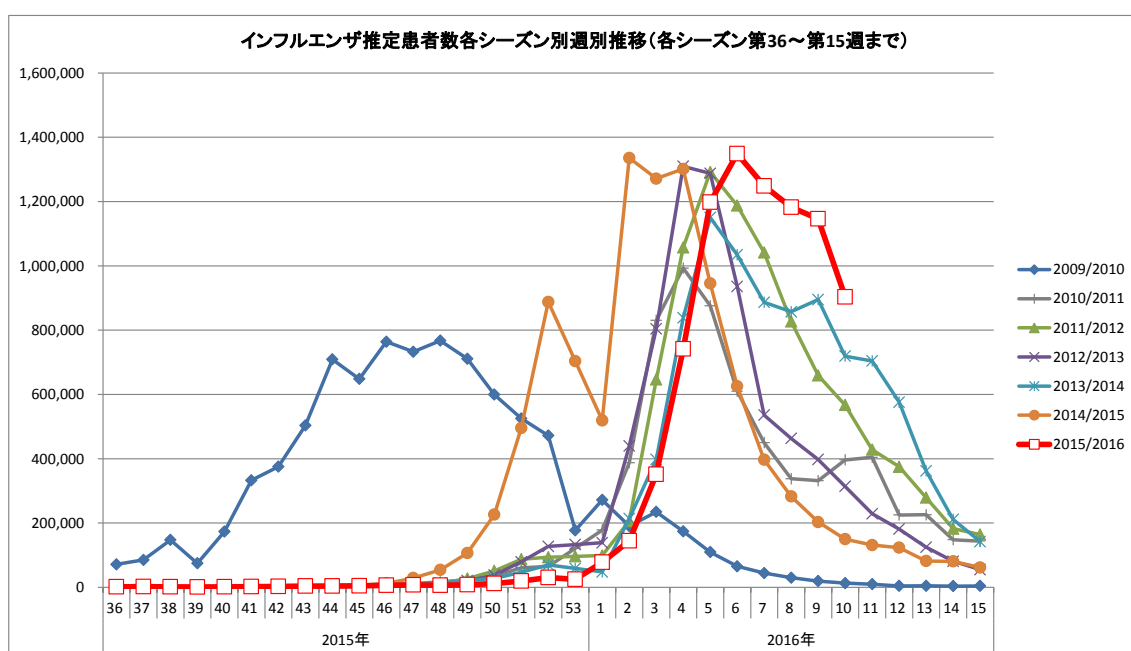


図1. 過去5シーズンと今シーズン（2015/2016シーズン）の第36～第15週までのインフルエンザ推定患者数の週別推移

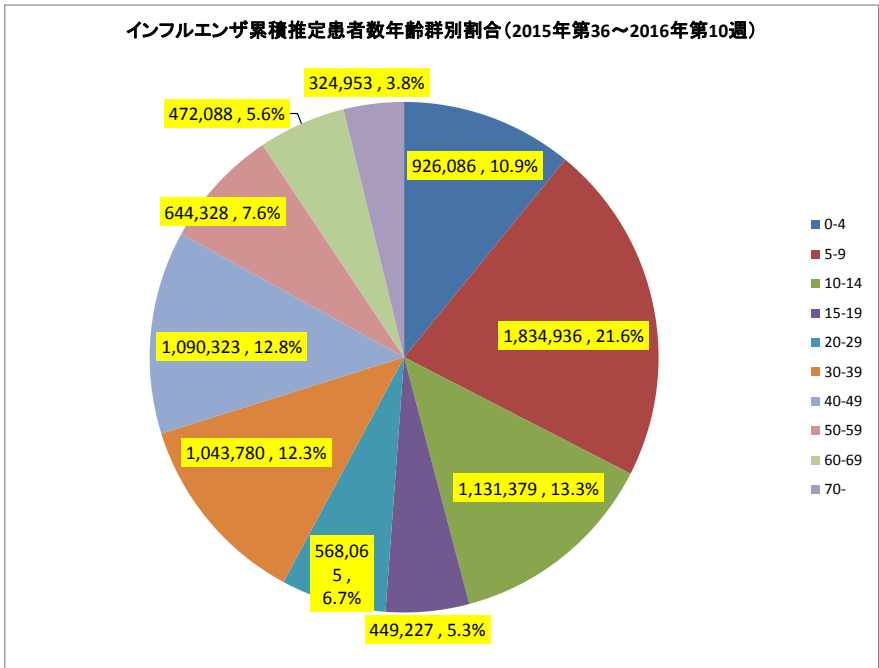


図 2. インフルエンザ累積推定患者数年齢群別割合 (2015 年第 36～2016 年第 10 週、累積推定患者数= 8,485,000)

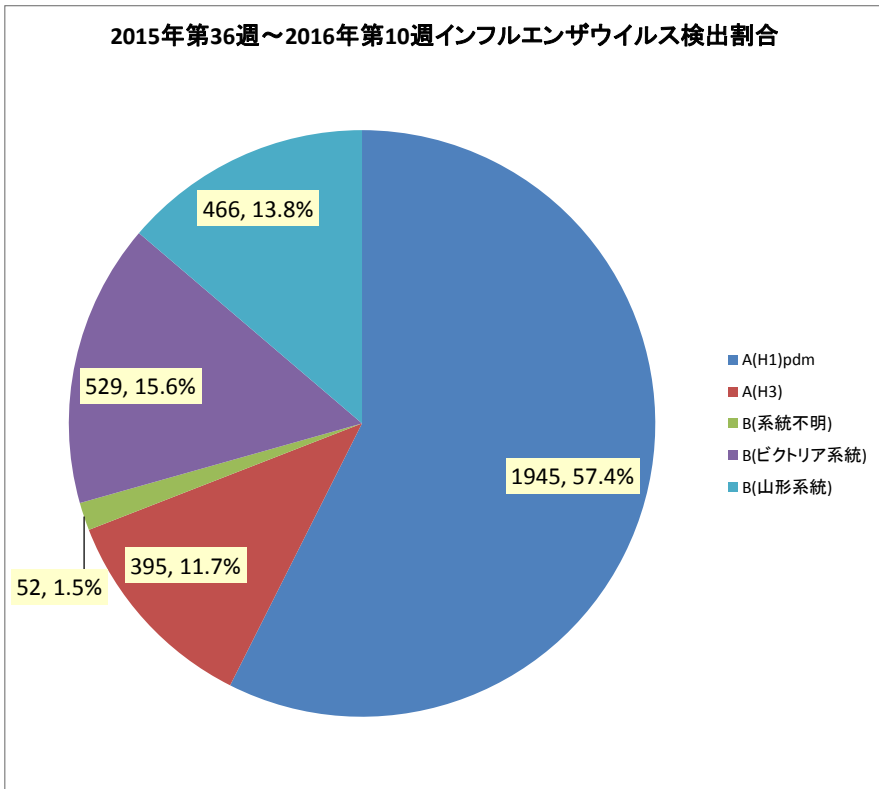


図 3. 2015 年第 36～2016 年第 9 週インフルエンザウイルス検出割合 (総検出数=3,387)